

炉辺の枕（1）

『デフ・ヴォイス』 社会的弱者の視点でミステリーが書ける作家

美賀多台 つだわたる

今までは映画の紹介をしてきましたが、今月から本の紹介をしたいと思います。書評とはいきませんが、私が面白いと思ったところを書いていきます。

まず、大まかに私の読書遍歴を紹介します。

絵本の記憶は曖昧ですが、本と言えるもので今でも覚えているのは幼稚園か小学1年生の時に読んだ、子ども向けに書かれた『ガリバー旅行記』です。小人国と巨人国が載っていました。

小学生時代は、量的には漫画が多いのですが、誕生日などのプレゼントで『少年少女名作文学』シリーズをねだっていました。今でも我が家にあります。本を捨てられないタイプの人間です。

その後、10代は星新一を入りにSFへ、働き始めてミステリーと小説の傾向は移っていきますが、今でも娯楽小説と映画評論、科学的読み物が好きです。最近では寄席物というか、落語に関する本もよく読んでいます。

今回、最初の1冊は3年前から読み始めた丸山正樹の代表作『デフ・ヴォイス』を紹介します。

手話通訳士が主人公

丸山正樹の本で最初に読んだのは『孤高の相貌』で「変わり者」という評価の初老の刑事、何森稔(いずもりみのる)を主人公にしたミステリーです。そこで描かれた社会的弱者や障がい者への視線がとても感じが良かったので、彼の作品を追いました。

『デフ・ヴォイス』はコーダ(children of deaf adults、聾唖の両親から生まれた聞こえる子ども)である荒井尚人を主人公にしたミステリーです。

彼は一度、警察事務職員として働いた経歴を持ち、その時に手話ができることから聾唖の犯罪者の取り調べを手伝われます。その後、警察を辞めて手話通訳士として働きます。

彼の経歴から法廷手話通訳を依頼されて、そこから現在と彼が17年前に関わった聾者が巻き込まれた殺人事件の真相が徐々に明らかになっていきました。

荒井が警察を辞めた理由が明らかになり、聾者に対する警察や社会全体の差別の実態も描かれています。

私は、この本で日本手話と日本語対応手話があること、手話にも方言があることも知りました。丸山正樹は聾者の教育や手話文化に踏み込んださまざまなエピソードまで挿入しています。

『デフ・ヴォイス』シリーズは4冊出ています。私はすべて読みましたが、動機も含めて優れたミステリーですし、社会的な背景、聾者の置かれている問題などもきちんと書かれています。しかし残念なことに丸山正樹が主要な文学賞を取っていないことからあまり知られていないようです。園田学園大学には彼の著書は置かれていませんでした。

是非読んでみてください。

